

序章

「ファンシー・ピクチャー（Fancy Picture）」とは、18 世紀英国のロイヤル・アカデミー初代会長ジョシュア・レノルズ（Joshua Reynolds, 1723–1792）と、彼のライバルであり肖像画家としての地位を確立したトマス・ゲインズバラ（Thomas Gainsborough, 1727–1788）によって展開された、主に子どもをモチーフとした風俗画の一種を指す。貧しい身でありながら穢れのない眼差しをもった田舎の少年少女を 1880 年代に描いたゲインズバラの一連の絵画に対して、レノルズがファンシー（空想的な）・ピクチャーと呼んだことでこの名称が定着した。レノルズ自身もファンシー・ピクチャーを制作しており、物乞いあるいは匿名の子どもをモデルに、森林や田園風景の中で佇む無垢な姿を捉えている。両者のファンシー・ピクチャーは貴族の間で需要が高く、さらに油彩や版画による複製によって大衆にも広く流布した。しかしこれまでの先行研究では、レノルズが没した後は人気が低迷し、19 世紀後半になるまで存在が忘れ去られてしまったものとして位置付けている。

ヴィクトリア朝でファンシー・ピクチャーを復興したのは、ラファエル前派兄弟団の創立メンバーかつ同派脱退後はアカデミズムの画家として活躍したジョン・エヴァレット・ミレイ（John Everett Millais, 1829–1896）であった。1879 年の《チェリー・ライブ》を皮切りに、ミレイがレノルズのファンシー・ピクチャーを模倣した作品をいくつも手がけたことが主な根拠とされている。1860 年代後半から 70 年代における 18 世紀英国美術を再評価する動向と連動し、ミレイはその頃から直接的、間接的にレノルズの作品を着想源としていた。しかし、ミレイが初めて制作したファンシー・ピクチャーとしてこれまで語られてきた 1863 年の《私の初めての説教》（図 1）は、レノルズからの影響を直接的に受けておらず、その後の 1860 年代前半の作例でも同様のことが言える。また、ミレイがこの時期に手がけた子どもをモチーフとした絵画は、個別研究もファンシー・ピクチャーに位置づける研究

も未だ不十分である。以上から本論では、レノルズへのオマージュとは異なるミレイのファンシー・ピクチャーの着想源と、19 世紀以降のファンシー・ピクチャーの継承について検討し、ヴィクトリア朝におけるファンシー・ピクチャーの特質に迫ることを目的とする。

第 1 章 J.E. ミレイのファンシー・ピクチャーについて

本章では、18 世紀のファンシー・ピクチャーの展開と、19 世紀のミレイによる復興の様相を確認した。

第 1 節では、ファンシー・ピクチャー復興の経緯を検討する上で前提となるミレイの画業と作品の変遷について概観した。歴史画やアカデミズムの伝統に習熟した学生時代を過ごしたミレイは、それを真っ向から否定するラファエル前派時代を経て、再びアカデミーの画家として伝統の継承を示す様式を展開した。子どもや少女への関心は 1850 年代から抱き始め、成長の過渡期にある少女の非永続的な若さに美を見出し追究していた。

第 2 節では、ミレイの着想源となった 18 世紀のファンシー・ピクチャーについて、ゲインズバラとレノルズそれぞれの特質を確認した。牧歌的な風景の中で感傷に耽る無垢な子どもたちの姿を捉え続けたゲインズバラと、神話や物語の登場人物に扮装した子どもたちが鑑賞者に主題を空想させる風俗画を描いたレノルズとで、ファンシーの展開の形は異なる。レノルズに関しては子どもの描写に官能性を仄めかせ、彼らのより成熟した将来の姿を連想させる表現も繰り返していた。

第 3 節では、ミレイならびに彼と同時期に活動したヴィクトリア朝の画家がレノルズの肖像画やファンシー・ピクチャーに倣って手がけた絵画について、時系列に沿って確認した。ヴィクトリア朝において人気が低迷していたレノルズを再評価する動向は、展覧会の開催や複製画の出版等によって 1860 年代後半から 70 年代にかけて盛り上がった。ミレイは 1860 年代後半から徐々にレノルズの模倣を強め、《チェリー・ライ

ブ》（1879 年）での成功を皮切りに、モデルの衣服や画面構成に 18 世紀のファンシー・ピクチャーの再現が如実に表れるようになる。

第 2 章 18 世紀末以降における「ファンシー」主題の展開

トマス・ローレンス（Thomas Lawrence, 1769–1830）は、レノルズの後継者として英国画壇を牽引した肖像画家であったものの、ファンシー・ピクチャーに関する研究においてこれまで言及されたことはなかった。しかし、本章ではファンシー・ピクチャーと近接する主題やモチーフの絵画を手がけ、肖像画に童話の要素を取り入れる嚆矢となった存在として注目した。

第 1 節では、レノルズとの関係を中心に見たローレンスの経歴と作品を確認した。ローレンスが手がけた田園風景の中で佇む少女の肖像画の中には、モデルが実年齢よりも年上の姿で描かれた例があり、幼児の近い将来の姿を理想化する意図が反映された可能性が考えられる。花のモチーフによって、無垢で純朴な少女時代の美しさがいつか終わりを迎えるものだと暗示する手法は、レノルズのファンシー・ピクチャーでしばしば子どもの無垢と成熟の狭間が仄めかされるイメージとも類似している。

第 2 節では、版画や書物の挿絵といった複製物として存在していた、ファンシー・ピクチャーと類似するイメージや主題の特徴を持つ 19 世紀前期に流布した作品について検討した。版画《子どもたちの水浴》（1804 年）は、ジョン・ホプナー（John Hoppner, 1758–1810）の 3 人の息子の集団肖像画《ホプナーの子どもたち》（1791 年）を元としている。異性装の幼児の図画的源泉としては、レノルズの《無垢の時代》（1785 年頃）がうかがえるものの、それよりも明らかに作為的かつ官能的な大人の女性像が反映された。同様に、裸体の少年には女神の姿が投影されている可能性も、先行作例との構図やモチーフの一致から示唆される。肖像画が版画化された際にタイトルが与えられ、水浴しようとする子どもの仕草に主眼が置かれる風俗画に転じたことで、幼児

にそぐわない性的描写がより強調されることとなった。さらに、1829 年に発刊された詩集の挿絵《ブラックベリー・ボーイ》も近似する事例である。処女喪失や性愛の意とも関連付けられるレノルズの《ストロベリー・ガール》（1772–73 年）のイメージが借用され、詩の本文でも、純粹無垢な少年に女性性を重ねながら、大人になることの危機から逃れることを切望する作者の意図が読み取られた。

第 3 章 ミレイが描いた子どもたち

第 3 章では、ミレイによる最初期のファンシー・ピクチャーである《私の初めての説教》（1863 年）と《赤ずきん》（1864 年、図 2）に着目し、18 世紀からの継承と、ヴィクトリア朝の特質とも言える制作背景を検討した。

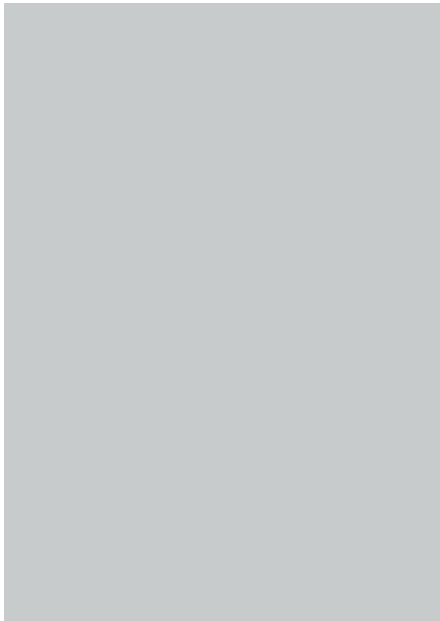
1860 年代は、福音主義に基づく道徳的規範を重んじ、勤勉さや敬虔さに理想像を見出すヴィクトリアニズムが中流階級に蔓延していた時期であり、《私の初めての説教》の健気な少女とこの理想が共鳴したことで高評価が得られたことが示唆された。また、1855 年の『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』（*The Illustrated London News*）クリスマス号の付録版画には、《私の初めての説教》類似する衣服を纏った少女が描かれている。この号の発行部数は当時 20 万部を記録し、広く大衆に流布した。ロンドンでも出版されていたフランスの服飾雑誌『ラ・モード・イリュストレ』（*La mode illustrée*）1862 年 10 月 27 日号には、女兒用マントの特集が掲載されている。ミレイは当時の大衆の好みや商業的な流行を察知し、作品に反映させた。

「赤ずきん」を絵画にした作例は『グリム童話』の英訳版が出版された 1823 年前後に制作されていた。1821 年頃にはトマス・ローレンスが《エミリー・アンダーソン（赤ずきん）》を制作しており、構図とモデルの身振りは明らかにゲインズバラの《犬と水差しを持つ田舎の少女》（1785 年）を借用している。1831 年頃にはエドウィン・ランドシア（Edwin Landseer, 1802–1873）も《赤ずきん》を発表した。ランドシアの《赤ず

きん》は、エングレーヴィング、またはカラー版のクロモリトグラフでしばしば版画化され、19 世紀においては商業用広告カードやクリスマスカードとして使用されやすかった。絵画が版画化を介して雑誌付録や広告となり、ヴィクトリア朝の消費生活との親和性を得るという、ミレイによる 19 世紀後期のファンシー・ピクチャーの特質は、本作品の版画が大衆向けに流布していく過程で先行していた。

終章

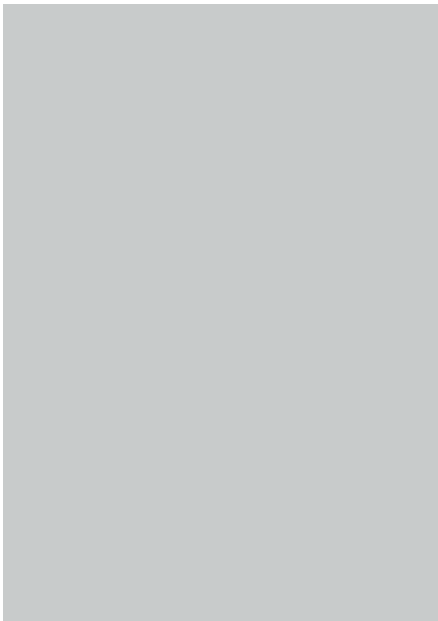
以上の考察から、18 世紀のファンシー・ピクチャーがレノルズの死後に姿を消した訳ではなかったことが指摘できる。とくに、ゲインズバラを明らかに模した《エミリー・アンダーソン（赤ずきん）》（1821 年頃）は、ミレイも同様に描いた童話主題のファンシー・ピクチャーの嚆矢と現段階で位置付けられる。また、18 世紀前期に確認された《子どもたちの水浴》や《ブラックベリー・ボーイ》といった作例はいずれも、レノルズのファンシー・ピクチャーの構図やモチー



（図 1）ジョン・エヴァレット・ミレイ《私の初めての説教》1863 年 油彩、カンヴァス 92.7×72.4cm ギルドホール・アートギャラリー 図版引用典拠：Peter Russell, *Delphi Complete Works of John Everett Millais*, Delphi Classics, 2020, p. 441.

フ、モデルの匿名性が確保されたタイトルが継承されつつ、幼い子どもがいずれ成熟した大人へと変貌することを予感させる描写がなされた。子どもにそぐわない性的描写はレノルズが度々ファンシー・ピクチャーで試みており、時を隔てたミレイも、大人の女性像を幼い少女の仕草に反映させている。ファンシー・ピクチャーの 1 世紀にわたるイメージの継承においては、庇護の対象ではなく性的な対象としての子どもの描写がなされてきた。

19 世紀のミレイにおいては、同時代の大衆の消費生活の流行や作品の購入者層の好みを察知しながら間接的にファンシー・ピクチャーを受け継ぎ、やがてレノルズの明らかな模倣を試みることで 19 世紀においてジャンルを再興させたと結論付けることができる。



（図 2）ジョン・エヴァレット・ミレイ《赤ずきん》1864 年 油彩、カンヴァス 35.5×25cm 個人蔵 図版引用典拠：Peter Russell, *Delphi Complete Works of John Everett Millais*, Delphi Classics, 2020, p. 463.